

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

創作のプラットフォームとしての台湾とマレーシア華人

及川茜 (神田外語大学講師)

文化、芸術の分野で活動するマレーシア華人にとって、台湾は中国語世界におけるプラットフォームの役割を有しているといえるだろう。かつて冷戦体制下で大陸中国への留学がほぼ不可能であった時期、中国語によって高等教育を受けることを望む華人の多くは、奨学金を申請して台湾に留学した。

そのうち文学者たちによる台湾留学のメモワールは、『台湾留学のあの歳月』(原題：我們留臺那幾年、黃錦樹・張錦忠・李宗舜編、クアラルンプール：有人出版社、2014 年)としてまとめられている。マレーシア華人作家が台湾の文学界で集団として存在感を示すようになったのは、1960 年代後半に『星座詩刊』を刊行した王潤華(1941 年生)の星座詩社にさかのぼるだろう。そのほか、温瑞安、方娥真(ともに 1954 年生)ら神州詩社の詩人たちが 1970 年代にごく短期間ではあったが積極的な活動を展開した。1980 年代以降になると、李永平(1947-2017)、張貴興(1956 年生)といった小説家が作品を発表し始め、90 年代には黄錦樹(1967 年生)らが、文芸創作と同時に評論の分野でも「馬華文学」(マレーシア中国語文学)の台湾における地歩を確かなものにしてきた。

映画・芸能についても同様に、マレーシア出身者はそれぞれの分野で存在感を示している。中でも中国語世界の外にもよく知られるのは映画監督の蔡明亮(1957 生)だろう。サラワク州クチン出身の彼は、20 歳で渡台、中国文化大学演劇学科を経て映画制作の世界に足を踏み入れている。中華映画ファンの間でも台湾の映画人として長く認識されていたと思われるが、クアラルンプールを舞台にした 2006 年の『黒い眼のオペラ』を機にマレーシア人監督として広く知られるようになった。ちなみに、ジョホール州スクダイの南方大学学院内にある馬華文学館には、蔡明亮の作品映像のほか、文集やテレビドラマの脚本など貴重な初期作品の資料もアーカイブされている。マレーシア映画人としての彼の横顔を知るには必須の訪問地であろう。

このほか、台湾で高等教育を受けたマレーシア出身の映画人には、廖克發(1979 年生)、陳勝吉の名前も挙げられる。長編ドキュメンタリー映画『不即不離』(2016)の廖克發は台湾芸術大学映画研究所修了、『分貝人生』(2017)の陳勝吉は同大映画学科卒業という経歴で、さらに 2 人とも「金馬電影学院」(Golden Horse Film Academy)に参加している。2009 年にスタートした金馬電影学院は、ホウ・シャオシェン監督が院長を務め、華語地域出身で 2 作以上の短篇作品を完成したことのある若手の脚本家、監督およびカメラマンを対

象としたもので、每期 10~12 人を受け入れ、集団創作によって短篇映画を制作し、台北金馬映画祭で上映するというものである。台湾ないし中国、香港の出身者が目立つが、歴代の参加者にはミャンマーの趙徳胤(Midi Z)やシンガポールのアンソニー・チェン(陳哲藝)の名前も見出せる。大学などの高等教育機関のほかに、こうした教育組織もマレーシアをはじめとする東南アジア各地の華人の後押しをしているといえよう。

また、芸能界でも台湾で活躍するマレーシア出身者は少なくない。広東語話者にとっては香港も活動拠点になり得るが、1997 年の返還後は台湾が最大の選択肢となっているように見うけられる。こうした芸能人が集結して制作されたのが、阿牛(アノウ)こと陳慶祥の監督・主演によるマレーシア映画『アイス・カチャンは恋の味』(原題：初戀紅豆冰、2010 年)である。メインキャストにはアンジェリカ・リー(李心潔)、ゲイリー・ツァオ(曹格)、品冠、フィッシュ・リョン(梁靜茹)、エリック・モー(巫賢)といった歌手が名を連ね、さらにカメオ出演でもベニー・ダイ(戴佩妮)、ニコラス・テオ(張棟樑)といった著名な歌手が顔を見せている。

2016 年からは蔡英文政権の新南向政策によって、文化・教育面でも東南アジア各国との交流に予算が割かれ、マレーシア関連の学術活動にも及んでいる。一帯一路をはじめとして中国が東南アジアに存在感を強める中、文化芸術の領域では、中国語世界のプラットフォームとしての台湾の役割は当面維持されるものと思われる。

< 筆者紹介 >

東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位取得退学。専門は日中比較文学で、江戸期における中国白話文学の受容のほか、近現代については、マレーシア中国語文学のうち特に台湾在住の作家をめぐる研究を進めている。論文に「サラワク作家のダヤク人表象」(『マレーシア研究』第 6 号、2018 年)、翻訳に『郝景芳短篇集』(白水社、2019 年)、『鯨向海詩集 A な夢』(思潮社、2018 年)、李永平『吉陵鎮ものがたり』(共訳、人文書院、2010 年)などがある。